

所 陵

No. 66

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



子持勾玉 (Compound curved bead
—komochi-magatama—
古墳時代 本山コレクション)

● 目 次 ●

神田孝平から本山彦一へのバトンリレー	徳田 誠志	2
お寺の本堂は近世公家屋敷の建物	藤田 勝也	4
高松塚古墳墳丘の景観変遷 (下)	米田 文孝	6
歳神を迎える	黒田 一充	8
若き司馬遼太郎と大阪	王 海	10
本山コレクションの青森県出土資料	山口 卓也	12
伊丹十三記念館を訪ねて	横本 力	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) Fax 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

神田孝平から本山彦一へのバトンリレー

—本山コレクションの来歴—

徳田 誠志

1 はじめに

関西大学博物館資料の中核である「本山コレクション」は、平成23年度に「登録有形文化財」に指定された。このコレクションは、本山彦一の収集資料と、明治政府の高官であり、且つ初代人類学会会長を務めた神田孝平の収集資料が含まれていることが知られている。しかしながら神田の逝去後、本山がこの資料を入手した経緯は、今ひとつあきらかでなかった。

しかるに今般、國學院大學所蔵大場磐雄資料の中に、神田から本山へのコレクション移転の経緯をあきらかにする記録が存在していることを知った。よって小稿において、この移転の経緯を速報しておきたい。

2 大場磐雄と『楽石雑筆』について

大場磐雄は、大正11年に國學院大學国史学科を卒業後、内務省神社局から神祇院考証課に勤務した。その後、昭和24年から國學院大學の教授となっている。

この大場が残した資料は『楽石雑筆』と名付けられ、彼の大学入学時から亡くなる直前までの日誌であり、調査記録である。

今回取り上げる資料は『楽石雑筆』巻九に収められている、昭和5年の記述である（註1）。この中に「故神田孝平氏所蔵品」と題された一文があり、次の通り始まっている。

「十月下旬木村氏来り、竹田玩古堂に存する故神田孝平氏所蔵品を見てくれという。その点数約一、二〇〇点余あり、石器多し、全部大略見たり、その覚書」

この序文の後、「石器時代遺物」「青銅器遺物」「古墳時代遺物」という章立てが続き、遺物のスケッチとともにその概略が記述されている。小稿では「古墳時代遺物」のうち、特に石製品についてのみ見ていくこととしたい。この石製品については、図1に示したように子持勾玉・車輪石・琴柱形石製品の概略図が描かれている。短時間に描いたスケッチではあるが、遺物の特徴

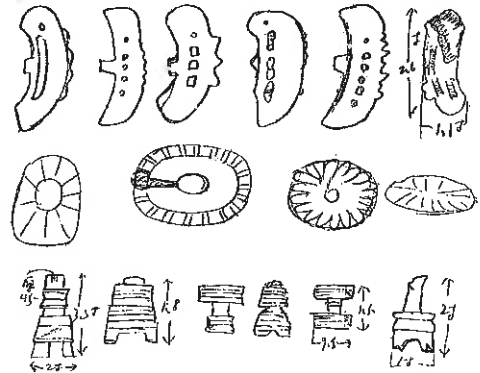


図1 『楽石雑筆』掲載「石製品」（註1より転載）

はよく捉えられており、所々には寸法の記述もある。よって現在関西大学博物館に所蔵されている資料との、同定作業が十分可能なものであるといえよう。そこで一例として、図1最下段の一番左に描かれた琴柱石製品を見ていくこととしたい。この琴柱形石製品は今日では、石上型に分類されているものであり、全長33寸・下端幅2寸と記されている。この大場が描いたと思われる琴柱形石製品を博物館所蔵品に求めたところ、写真1に示した資料で間違いのないものと判断できよう。写真1の資料は、全長10.4cm、下端幅6.1cmを測り、大場の計測値と数ミリの誤差にとどまっている。



写真1 関西大学博物館所蔵琴柱形石製品

このように現在ではまだ数点の同定作業を終えたのみであるが、大場の記録が間違いなく神田コレクションが骨董商の手元にあったときの記述であることを確信させるものである。

そして大場の記述は、次の一文で締めくくられている。

「以上にて大体のものを記せり。而して如上の

全部の価格は約一万円といえり、果して何人の手に入るべきか、括目すべき事なり。」

そこで、当時の「1万円」がどれくらいの価値であったかについて言及しておこう。当時の物価を、今日の何と比較することが適当であるかは難しい問題であり、昭和5年当時の物価をいくつか見てみよう（註2）。身近な物価を例にすると、山手線の初乗り運賃が5銭であり、弁当のお茶も同額である。このふたつを今日で比較すると、山手線の初乗り運賃は130円であり、ペットボトルのお茶もほぼ同額としてよからう。よって、この両者を比較すると物価の上昇は2600倍という数字となり、すなわち昭和5年の1万円は、現在の2600万円となる。この金額は、当然かなり高額であって、おいそれと手を出せる金額ではない。しかし、換言すれば本山のような大企業の社長であれば、あるいは社長であるからこそ一括で購入できたともいえよう。

3 「竹田玩古堂」と売却の時期

続いて「竹田玩古堂」の詳細と、売却の時期が神田の没後30年余りも経た昭和5年であったという点を考えていきたい。

まず骨董商「竹田玩古堂」についてであるが、この業者の情報は、古典籍売買の泰斗反町茂雄の残した記録に見つけられた（註3）。この「竹田玩古堂」の主人は竹田泰次郎といい、本業は古版画、特に浮世絵の売買を専門とする店の主である。浮世絵と考古資料は直接結びつかないのだが、反町の記述によれば竹田は本業の傍ら勾玉の収集に熱心であって、自らを「勾玉狂」と称するほどであり、その出土を耳にすると百里二百里を遠しとせず、馳せつけて買い取ろうとしたことで有名であると記してある。すなわち考古資料の売買は本業とはいえないものの、自らの興味もあって神田所蔵品の処分に係わったと考えることができよう。

次に、売却時期が昭和5年であることについては、神田家の事情を見ておきたい（註4）。神田家は男爵を受けた孝平が明治31年7月に逝去する。その後、婿養子の乃武が襲爵するが、乃武も大正12年12月に没する。続いて大正15年3月には、孝平夫人トクも没する。よって昭和5年時点の神田家当主は、孝平から見れば孫の金樹である。興味深いことは昭和5年の6月に

は、金樹からの願い出により男爵位を返上している。すなわち孝平の収集資料が竹田玩古堂に売却され、大場がこの資料を実見した時期は、神田家としては大きな変化を迎えていたことがわかる。いずれにせよ神田コレクションは、孝平の没後昭和5年までの約30年間、そのままの形で神田家に残されていたと考えることが妥当であろう。

4 おわりに

以上、神田コレクションは竹田泰次郎が取り扱うことによって、神田家から本山彦一の手に渡ったことが明確となった。このことは大場磐雄が残した『楽石雑筆』という記録が残されていたからこそ確認できたことである。

小稿では速報として、神田コレクションの移転状況を記述してきた。最後に、今後の課題に触れてまとめてしておきたい。今後すべき調査は多いが、まず第一に取りかかることは、大場の残した資料と現在博物館にある原物との同定作業であろう。そして、大場の記録した資料の中で存在が確認できない資料の有無をあきらかにしたい。さらには神田の著作である『日本大古石器考』に掲載されている資料との同定作業も必要となってくる。このような作業を積み重ねていくことによって、本山コレクションの形成過程を明確にできるものと考えられる。

初代館長網干善教は、博物館資料の変遷は単に「もの」の移動ではなく、その資料に係わった人々による魂のバトンリレーであると述べている。今回、神田から本山へのバトンリレーの一端を解き明かしたことによって、今後の関西大学博物館資料の調査研究に有用であることを願って速報を締めくくりたい。

謝辞 小稿を草するにあたっては本学文学部長谷洋一教授に多々ご教示賜った。記して、感謝申し上げます。

註

註1『大場磐雄著作集楽石雑筆（中）』第7巻 1976年 雄山閣

註2『物価の文化史事典』森永卓郎監修 2008年 展望社

註3『紙魚の昔がたり明治大正篇』反町茂雄編集 1990年 八木書店

註4『平成新修旧華族家系大成』下巻 同編纂委員会 1996年 霞会館

宮内庁書陵部首席研究官

お寺の本堂は近世公家屋敷の建物

藤 田 勝 也

都心では老朽化した古い建物は取り壊し、更地にして新築する、あるいは駐車場などとして土地の有効活用をはかる、いわゆるスクラップ＆ビルドが、都市再生の有効な一手法とされている。たとえば京町屋は平安京に生まれた、日本で最初の庶民のための都市住宅である。京都の（日本の、あるいは世界の、といってもよいが）歴史と伝統を示す貴重な「文化財」である。にもかかわらず古くさいから世情にあわないからといっては取り壊し、最新設備のRC造のオフィス、マンションなどにとってかわる。「京都」らしい伝統的な景観、風情が町中から急激に消滅しつつあったのは、そう昔のことではない。

ところが最近では、「京町屋ブーム」らしく、簡単に取り壊すのではなく、カフェやレストラン、高級宿泊施設などとして有効に活用しようとする事例が結構あって、町屋に宿泊すれば日本文化を体感できるということで、海外からの旅行者には高額な宿泊料金でもたいそう人気があるらしい。また京都のある大学では伏見に京町屋のキャンパスを開設するという。テレビや新聞などマス・メディアでこうした事例が取り上げられることも増え、そのこと自体、まことに結構なことではある。

しかし少し考えてみれば、この京町屋のように、旧建物の用途を変えてさらに継続的に使用する、あるいは解体して別の地に移し、場合によっては改変の後、異なる用途の建物として再生、活用するなどといったことは、前近代の日本ではあたりまえの話であったことに思い至る。木造は、解体、移築、再建、改造という一連の行為を容易に行えるところに、きわだった特長がある。そして日本はもとより木造建築の国なのである。

木造建築の優れた伝統文化によりやく気付き、見直されてきたためなのか、このような営為に合理的、経済的な優位性が担保されるようになったからなのか、あるいはまったく無意識なのか定かではないが、とにかくにもリノベ

ーションなどと、こういう時はなぜか横文字で、古い建物を改修、再利用するのがトレンド（＝趨勢、流行）である。

用済みになってしまった建物をすぐに破却してしまうのではなく、第二、第三の人生が送れるように大切に手当てをし、あるいは場所を変えて存続させる。昨今の京町屋のように大きく取り上げられることはなく、一般にはあまり知られてはいないものの、日本の建築の伝統文化が今なお健在であることを私たちに教えてくれるこのような建物は、ごく身近にある。

大阪の寺町はその名の通り古い由緒をもつ多くの寺院が集積する地域である。とはいえ昭和20年の大阪大空襲あたりはほとんど焼失してしまって古い建物は遺らず、現在見られるのはいずれも戦後で、中にはRC造の建物もある。その一角に鳳林寺（天王寺区六万體町）はある。

このお寺は天王寺寺町を形成した曹洞宗寺院の一つであるが、堂宇のみならず本尊、宝物等のいっさいが戦災に遭い灰燼に帰したのは周辺の諸寺院と事情を異にしない。しかし南の通りに面してたつ山門、そこから正面をこちらに向けて奥に見える本堂はなぜか古色を帯びた木造の建物で、江戸時代に遡ることは一見して容易にわかる（写真1）。

実は、本堂は昭和34年にこの地に建てられた戦後の建築なのであるが、しかし新築ではなく移築による再建であった。寺伝によれば、文久



写真1 鳳林寺本堂（大阪市天王寺区）

3年(1863)二條家当主の二條斉敬が関白太政大臣に任命されたとき、水戸藩の叔父徳川斉昭がこれを祝してたてた「宸殿」で、「銅駝御殿」「関白御殿」と呼ばれていたその建物を移築したものであるという。すなわち摂家である二條家の、京都の本宅屋敷における江戸時代の旧建物が現在見られる本堂なのである。ただしこの二條家の「宸殿」が鳳林寺の本堂に至るまでの経緯はやや複雑である。

17世紀中頃から幕末まで、二條家の本宅屋敷は今出川邸で、その位置は現在今出川通りをはさんで京都御所の北隣、学校法人同志社大学のキャンパスにあたる。明治16年この地に設立された平安義校は王政復古後の官家士族の師弟を対象にした教育機関で、そのために今出川邸が貸渡されることになった。二條家は東京に移り、本宅今出川邸は空き家になっていたため活用されたわけである。銅駝御殿は旧公家や華族たちの集会所として用いられたという。その後、明治24年発足した平安義會は平安義校を閉鎖し、高等教育のための奨学金事業を開始する。今出川邸の土地・建物はこの平安義會によって管理され、建物はそのまま下賜、土地は払い下げられた。

遡ってすでに明治10年に同志社女子部が同志



写真2 同志社女子部の頃
むこうに見える瓦葺きの建物が銅駝御殿か



写真3 銅駝寮

社英学校の東部にあたるこのあたりの土地を購入していたが(写真2)、昭和21年に同志社は平安義會所有の土地・建物の購入を決定し、当該地一帯は学校敷地となる。そして昭和23年、銅駝御殿は同志社女子専門学校の寄宿舍「銅駝寮」として供用される(写真3)。しかしその10年後には鳳林寺へ売却されることになり、前記したように建物は翌昭和34年に移築されたのであった。

以上のように、二條家の本宅今出川邸の「宸殿」にはじまり、平安義校→平安義會→同志社女子専門学校、さらに京都から大阪の鳳林寺へ移され本堂となった。二條家の建物としては約20年だが、その後、平安義校、平安義會さらに鳳林寺本堂としての期間は各約50年をこえる。その間に女子寮として用いられることもあった。

こうした経歴から現本堂には増改築の痕跡が少なからず見られ、たとえば須弥壇正面の柱2本は本堂として再活用する際の新設で、背面には位牌壇を収納するための下屋が設けられた。そのほか改修箇所はあるものの、公家社会の最上位に位置する摂家の住宅遺構という出自は、なんとも穏やかな外観の印象にあらわれていて、お寺の本堂でありながら住宅的な雰囲気は今なお醸し出している。なお山門は薬医門で、二條家今出川邸の南西部にたつ表門がこれにあたるものと考えられ、本堂より古く天明大火後の再建によるものである。

いずれも内裏の周辺に位置した二條家を含む五摂家は維新後東京へ移転し、旧屋敷跡地の大半は現在京都御苑として整備されている。いっぽう建物は他所へ移築・再建されて現存し、鳳林寺本堂もその一つである。ほかに京都市内では府立鴨沂高校の正門や茶室、東山小松谷の正林寺本堂がいずれも九條家の遺構である。このような建物には解体・移築・改修の手が入っていて、創建当初の状態であることは少ない。しかし移築・改修の痕跡もまた個々の建物に固有の優れた再生・活用の履歴ととらえるなら、日本の建築の歴史と伝統をむしろよく表す文化財として、積極的に評価されるべきではないか。そのような想いもあって、とくに旧公家屋敷の建物について、遺構と文献史料の両面から現地調査を近年進めているところである。

環境都市工学部教授

高松塚古墳墳丘の景観変遷（下）

米 田 文 孝

元禄期に続く享保・文化の陵改めも、先に比定された高松塚古墳を文武天皇陵とすることを踏襲したが、民間では中尾山古墳とする説(『大和志』『大和名所図絵』)や、現陵の天武・持統陵古墳を檜前安古岡上陵とする説(『打墨縄』『首註陵墓一隅抄』)などの異説もあった。このため、安政の陵改めでは、天武・持統陵古墳を檜隈安古岡上陵に、同じく五条野丸山古墳の後円部(畝傍陵墓参考地)を檜隈大内陵に改定した。この結果、高松塚古墳は文久期の修陵を受け改定されることなく、墳丘および周辺地形が保持されたのであろう(写真5)。

最終的に1881(明治14)年、文武天皇の檜隈安古岡上陵として、高松塚古墳の東南約200mに位置する栗原塚穴(ジョウセン塚)古墳が文武天皇陵として決定された。この改訂には前年、元は梅尾高山寺の所蔵であった『阿不幾乃山陵記』が個人所有となり、その詳細な記述内容を根拠に、檜隈大内陵が現在の天武・持統陵古墳と改訂されたことや、大和・山城の天皇陵の所在地の考証を行った谷森善臣の『山陵考(所



写真6 発掘調査前の高松塚古墳

在考証)』などが影響した。この間の経緯については、大澤清臣・大橋長喜による「天武天皇持統天皇檜隈大内陵所在考」、及び「文武天皇檜前安古上陵所在考」に詳しい。

これ以降、高松塚古墳とその周辺は国有地(雑種地)になったが、1931(昭和6)年には大蔵省大阪税務監督局が奈良県に売却を照会したこともあった。この時は県史蹟名勝天然記念物調査会委員佐藤小吉の調査報告により売却は免れ、1972(昭和47)年の発掘を迎えるまで、現状が保たれた。ただしこの間、国有地ではあるものの陵墓ではないために管理が及ばず、農業環境の変化により芝草が刈り取られないことなどから推定樹齢200年を超える松の大樹も何時しか枯死し、墳丘にはネズミモチや孟宗竹が繁茂する植生環境に変化した(写真6)。

1972年の発掘調査では墳丘に発掘区が設定され、極彩色の壁画が描かれた横口式石槨を内部主体とすることが確認された。高松塚古墳の築造後、石槨が人の目に触れるのは平安時代末から鎌倉時代にかけての時期と推定される盗掘以来のことであるが、その墳丘の姿は国外でも速報された(写真7)。発掘調査終了後には、墳丘の南側に石槨と壁画の保存施設が設けられた。

なお、現陵の文武天皇陵古墳について『陵墓地形集成』をみると、一辺45~60mの不整形な五角形に区画されている。南南東に面する拝所の奥には直径約15m、高さ約3.5mの円丘状の



写真5 幕末期の高松塚古墳(『陵御箇所』)



진흙으로 메운 入口 石積横穴式石室의 内部主体 高松塚古墳墳丘의 調査中

写真7 調査中の高松塚古墳墳丘

(『韓国日報』1972年3月29日号)

高まりがあり、その背後(北側)には接するかのよう、急勾配の不整形な丘が横たわる。石田茂輔によると、この円丘は破壊された切石積横穴式石室を覆い築いたもので、不整丘はこの切石積横穴式石室を内部主体とした古墳の墳丘残存部であると推定する。

一般的に、文久の修陵とよばれる事業は、宇都宮藩が幕府に差し出した「山陵修補の建白」に端を発して実施されたもので、その報告書ともいえる『文久山陵図』では、修陵以前の姿を描いた「荒撫」図(写真8)と、修陵による成果を描いた「成功」図(写真9)が描画されており資料的な価値が高い。文武陵については、両図とも内部主体である切石積横穴式石室の羨門部らしき石組が描画されており、石田茂輔の推測を補強する。

文久の修陵事業ではこのような陵墓の外形的な変化にとどまらず、朝命により幕府が設置した山陵奉行に始まる恒常的な管理と祭祀が行われるようになり、明治維新後は国家による陵墓管理体制が強化された。

この文久の修陵事業の経緯については、戸原純一・上田長生などの論攷に詳しいが、文武天皇陵古墳にみられる改変のみならず、多くの陵墓が大きく改変・整備されていることに留意する必要がある。これには1862(文久2)年、宇都宮藩家老であった戸田忠至(山陵奉行)が公武合体を背景に最高責任者として実施した畿内一円における陵墓巡検の結果、盗掘により内部主体である石室や石棺は露呈し、墳丘は耕作地として開墾されたり墓地として利用されたりするなど、言語に絶する荒廃の実態を目にし、あ



写真8 『文久山陵図』に描かれた文武陵(荒撫図)



写真9 『文久山陵図』に描かれた文武陵(成功図)

るべき本来の姿に整備することを目的としたため、大規模な改変に繋がった。

このように、高松塚古墳にみてきた事例をはじめ、古墳墳丘の植生遷移をはじめとした景観は鎮守の森と同様、築造された地域や時代との関係において変遷しており、人々の古墳に対する意識を如実に映す鏡であることがわかる。

【引用・参考文献】

- 石田茂輔「文武天皇陵隈安古上陵」『国史大辞典』13 1992
- 上田長生『幕末維新期の陵墓と社会』思文閣出版 2012
- 小椋純一『森と草原の歴史』古今書院 2012
- 宮内庁書陵部陵墓課編『陵墓地形集成』学生社 1999
- 末永雅雄編『壁画古墳高松塚』奈良県教育委員会 1972
- 外池昇・西田孝司・山田邦和『文久山陵図』新人物往来社 2005
- 太政官記録局編(大澤清臣・大橋長喜)「山陵」『太政類典』第5編31巻第4類 1881
- 玉井什「元禄十⁷年山陵記録」『庁中漫録』第53巻 1717
- 戸原純一「幕末の修陵について」『書陵部紀要』16 宮内庁書陵部陵墓課 1964
- 奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡志料』1915
- 奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原京展』朝日新聞社 2002
- 広吉壽彦「明日香村高松塚の元禄調査」『青陵』20 橿原考古学研究所 1972
- 文化庁文化財部『月刊文化財』532号 第一法規 2008
- 文化庁ほか「平成18年度高松塚古墳墳丘の調査」パンフレット 2006

文学部教授

歳神を迎える

黒田 一 充

大晦日の夜は、普段とは違うことをする伝承が各地に残っている。大阪府熊取町和田では、「大晦日の夜は、宝を積んだ車や馬が来るから家の戸を少し開けておき、徹夜をして眠らない」という話を、明治33年生まれの方からうかがったことがある。また、高野山の南西、和歌山県美里町（現在・紀美野町）長谷宮のあるお宅では、明治39年生まれの方から「大晦日の夜は、家族の人数分の草履を用意して、鼻緒に半紙を巻いて縁側に置く。その横に注連を張った大きなお櫃を置いて炊事場から汲んだ水を入れ、一升入る柄杓でその水を汲み、若水として顔を洗う」とうかがった。時代劇で旅籠に着いた旅人が、まず玄関で宿が用意した盥の水で汚れた足を洗う場面を連想させる。遠くからやって来る客人を迎えるための用意であろう。各家で、門松や注連飾りをするのは、こうした歳神（正月の神）を迎える準備なのである。

そうかと思えば、この夜は何か悪いものも外をうろついているようである。長崎県壱岐島の郷ノ浦町では鬼の夜とされ、「この夜におとなしくしていない子どもは、家の外に出されて鬼にさらわれるのだ」という話を聞いた。大晦日の夜に百鬼夜行に出会う話は、『今昔物語集』（巻16—32話）にも記されている。

夜明けまでに無事、歳神を家に迎えることができ「明けましておめでとうございます」と祝うのである。



写真1 木津川市加茂町銭司・春日神社境内の砂まき
(2012年撮影)

このような伝承だけではなく、目に見える具体的な形で歳神を迎えるところもある。京都府南部の木津川市加茂町銭司は、木津川の北側斜面に形成された集落である。集落背後の山の中腹に春日神社がある。この神社では、大晦日の前日から翌年の宮守を中心に正月を迎える準備が行われる。本殿正面の石段下に門松を飾り、神社の裏山から採ってきた椎の割木を7～8本ずつ束にし、注連縄を張ってシダの葉を付けた斎木を本殿や小祠前の左右に飾る。それが終わると砂まきが行われる。参道の土のところは、道を横切るように砂で線を引いて梯子模様にし、途中の少し広い場所と境内は、格子模様に砂をまく（写真1）。

境内の準備ができると、17時前に籠り場の囲炉裏に置かれた檜の生木に火を付ける。この木は福櫓と呼ばれ、この火が消えるまで宮守が神社に籠もる。現在は1月3日の午後まで籠り、4日は朝から東組・西組の当番が勧請縄を作って掛けるが、昔はその翌日の5日朝まで籠っていたという。

このような砂まきは、西隣の井平尾の春日神社や、南西の山間部に入った観音寺の三十八神社の境内でも行われていたが、現在はなくなっている。こうした事例をあげると、神社の行事のように思われるかもしれないが、大晦日の砂まきは、京都府南部の宇治市から奈良県北部、大阪府枚方市や交野市などの地域で、個人の家の庭で行っていた報告がある。

銭司でも数年前まで庭先に格子模様を描いていた家があったとのこと



写真2 大和郡山市野垣内町の砂まき
(2010年撮影)



写真3 大和郡山市観音寺町の砂まき（2010年撮影）

であり、観音寺でも波形や飛び石を描いていた。寿などの文字を書くところもあるようだが、木津川などの河川の砂は採取ができなくなったことや、アスファルトに砂をまくと車のタイヤが滑るため、だんだんやらなくなっているという。

模様ではなく、砂道を引くところもある。大和郡山市野垣内町の春日若宮神社では、摂社の住吉社・稲荷社から引かれた砂の線が本殿の前で一本になり、そのまま真っすぐ正面の鳥居の外まで延びている（写真2）。社前の道路に出て左右に分かれるが、境内の角のところで途切れている。南隣の観音寺町の八幡神社でも、本殿から鳥居の外へ向かって砂の線が引かれ、末社や観音堂・地藏堂・手水舎などから延ばした砂の線が合流する。砂道は、鳥居から集落内に出て、すぐの辻を左右に分かれたところで途切れている（写真3）。

同市白土町の白坂神社では、氏子の各地区から選ばれた年番の宮守たちが注連縄などの準備をし、境内を掃き清めると夕方から砂道を引く。鳥居前の道路を東西の辻まで道路上に砂をまいて道を作り、最後に拝殿の入り口から真っすぐ鳥居に向かって道を引いていく（写真4）。昔は川の砂を使ったそうだが、現在は買ってくる



写真4 大和郡山市白土町の砂まき（2011年撮影）

という。

これらの砂道は正月様の道だといい、3地区とも道路が舗装されていなかったころは、神社の砂道を延ばして、各家の玄関までつないでいたという。初詣の際には、踏まれてなくなっていくが、各家から氏神社までの参詣路を示すとともに、正月に神が各家を訪れていることを目に見える形で表している。

このほかにも、大晦日の夜に実際に神が訪れる所作をするところもある。奈良市東部や山添村から宇陀市、桜井市にかけての東山中と呼ばれる地域では、福丸迎えという行事がある。家ごとに行うところと、子どもたちが集団で行うところがあるが、火の付いた松明を持って唱え言をしながらか福丸を迎えることが共通している。

天理市伊豆七条町では、この福丸迎えの行事が奈良盆地の中で唯一残っており、かつてはもっと広範囲に行われていたことが推定できる。

日が暮れると、子どもたちが青竹を持って各家を廻る。迎える家では、玄関先や庭に藁束を組んでおき、子どもたちがそこに火を付けて、火の中に青竹を突っ込みながら「フクマルコッコー、フクマルコッコー」と火が消えるまで唱え言をし（写真5）、そのお礼にお菓子を受け取る。本来は男の子だけの行事だが、少子化のため近年は女の子も加わるようになっている。しかし、調査時は男の子1名と女の子3名の小学生たちが行事に参加していたが、翌年は男の子ひとりだけになったという。

歳神の迎え方はさまざまであるが、古くから伝えられる民俗では、1年の区切りである大晦日の夜は特別な過ごし方をする夜なのである。



写真5 天理市伊豆七条町の福丸迎え（2010年撮影）

文学部教授

若き司馬遼太郎と大阪

王 海

「国民的作家」と呼ばれた司馬遼太郎（1923-1996）は、関西大学とも縁の深い人物である。司馬は早くから故文学部教授谷沢永一氏、元学長河田悌一氏、法学部教授山野博史氏などと親交を結んだ。1989年に、本学100周年記念会館の落成を記念するため、国際シンポジウムが開催された。司馬はパネリストとして出席し、「芳香千里」という色紙を揮毫した。同色紙は本学の年史資料展示室に設置され、本学との親しい関係を語っている。



国際シンポジウムにおける司馬遼太郎（中央）
関西大学年史編纂室所蔵

幸運ながら筆者も司馬を研究している。筆者は博物館にある大阪都市遺産研究センターで勤務しているが、ここで大阪に関する行事を手伝っているうち、「日本」という視点だけでなく、「大阪」という、より具体的な環境で司馬を把握する必要性を感じるようになった。

大阪の文化を発信する文化人として、司馬はすでによく知られている。大阪育ちという要件はもとより、青年期のいくつかの経歴は、司馬が「大阪」を意識するきっかけとなった。本稿では学生時代・記者時代の司馬の大阪との関係を概述してみる。

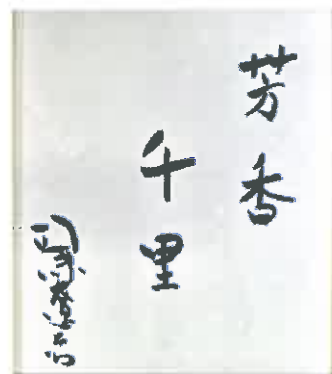
大阪育ち

司馬の自伝によれば、彼は父福田是定、母直枝の次男として生まれ、3歳まで奈良県北葛城郡で養育された。後に大阪市浪速区西神田町89

に移り、終戦まで20年間ぐらい住んだ。旧制上宮中学校の1年生の時に書いた作文（1936年12月）「物干臺に立って」では、稲荷小学校や高島屋、歌舞伎座が次々と姿を現してくる。大阪浪速区の町並みを描いたこの文章は、司馬の最も古い作品と言われる。

大阪で学生時代を送った司馬は、学校をあまり評価しなかった。試験勉強が得意でないため、受験に数度失敗し、大阪外国語学校に入学しても、専門的教育に馴染まなかった。そんな彼を魅了した場所は、浪速区にある新世界と南区にある市立御蔵跡図書館であった。内国勸業博覧会をきっかけとして繁盛を遂げた新世界では、通天閣を中心に遊園地や芝居小屋、映画館、動物園、飲食店などの娯楽施設が集中していた。このような新世界は、学校嫌いの司馬にとってまさに天国であった。当時の生活について、司馬は「九銭もにぎって新世界へゆけば、日曜日の朝から夜がふけるまで遊べた」と回想している。

新世界のほかに「生活の半分、精神的には半分以上」を占めるのは図書館であった。学徒出陣まで8年の間、司馬は授業をサボり、図書館に籠っていたという。その中に、大阪で発祥した立川文庫をはじめ、吉川英治の時代小説を満遍なく読んだ。猿飛佐助、霧隠才蔵、大石内蔵助、宮本武蔵など、司馬は時代小説や映画に登場した人物に心を惹きつけられた。学校よりも映画と時代小説。このように、司馬は大阪の大衆文化の中で学生時代を送ったのである。もちろん、その頃の生活は「非常時」によって厳しく規制されたのだが、市井生活が司馬の知識や人格的形成に大きく影響を与えたに違いない。



色紙「芳香千里」
関西大学年史編纂室所蔵

大阪離れ

時代小説と映画に耽る学生生活は、戦局の悪化によって途絶えた。1943年司馬は大阪外国語学校を仮卒業し、翌年学徒出陣のため満洲の四平陸軍戦車学校に行かされた。1945年本土決戦を迎え、司馬は釜山経由で新潟に輸送され、後に栃木県佐野市で終戦の報に接し、同年12月、空襲で焦土となった大阪に帰った。学生時代親しんだ新世界は壊滅、図書館も焼失し精華小学校に移転した。「将校服姿のまま大阪へ帰ってきたんですが、私にとって大阪は故郷の街だから、誰かに会いたくて、しかし焼跡になっていたので誰もおらず、結局図書館を探したんです。…しかし、図書館は4階に間借りしていて窮屈なので、すぐ出てしまいました」。司馬は当時の虚しい心境を振り返っている。

終戦直後の深刻な生活状況において、生きることがすべてであった。司馬が最初に働いたのは、今里の町工場で肩引きのついた荷車を引く仕事であった。ところが思う通りにならず、すぐやめてしまった。その後猪飼野の闇市で「一本の焼け電柱」に「幾日かの風雨に洗われ、墨も紙もおおかた剥落した」募集ビラを見つけ、その東5丁目8にある新世界新聞社に応募した。それが司馬の新聞記者の始まりであった。しかしわずか五ヶ月後、同僚の大竹照彦が上司と衝突したことが原因で、二人は辞表を叩きつけた。友人の紹介で、司馬は新たな職場を京都四条にある新日本新聞社に決めた。しかし当時新聞用紙の横流しが発覚し、新聞協会から用紙の配給が切れてしまった。その被害を受け、1948年に新日本新聞社は倒産した。三度目の新聞社は、京都市下京区にある大阪新聞社京都支局であった。入社翌年、妻とともに京都市左京区聖護院川原町に借家住まいを始めた。そこで、彼は5年間宗教を担当する記者として、京都の古刹で美術品や建築に関する記事を書き続けていた。以上の経緯から、終戦直後司馬は大阪を生活の拠点にし、直接大阪取材したのは、新世界新聞社での1年ぐらいかもしれない。実際に、京都へ引越した時点で、司馬の生活範囲は大阪からほぼ完全に離れたことになる。終戦直後生計を立てるため、転職を次々と余儀なくされた青年像が浮き彫りにされている。

「大阪離れ」といった生活状況は司馬の文章

にも反映されている。1952年まで、すなわち大阪本社転勤までの司馬の作品では、京都の寺を中心に京都の歴史や文化などを描くことが圧倒的に多く、大阪に関する文章は見られない。「大阪育ち」でありながら、1952年(29歳)までの司馬は大阪とほとんど接点なく暮らしていたと言えよう。

不本意であった大阪復帰

1952年7月に、大阪の交通の要衝、北区梅田27に産経会館(サンケイビル)が完成した。大阪新聞社と産経新聞社も入り、規模、高さ、設備においても、戦後大阪の復興を象徴する建物だと評価された。このような新聞社が拡大する時期に、司馬に人事異動の社命が回ってきたのである。「大阪本社地方部での地味な内勤仕事」のようで、しかも京都支局長の松村収に義理があるとして、司馬は転勤に難色を示した。だがこの不本意な異動も結果的に、大阪の知識人と交流を深め、大阪を発信する代表的な作家になることに結びつくとは、司馬は想像もしなかっただろう。

その頃司馬の所属は産経新聞社に変わったが、彼が活躍したのは姉妹紙の『大阪新聞』であった。『産経新聞』は産業経済や家庭生活の記事を重視するため、文化欄は主流ではなかった。それに対して『大阪新聞』は地元紙で「大阪第一主義」を掲げ、文化欄を常設し、大阪ゆかりの知識人を多数招いていた。文化欄の編集者の一人として、司馬は企画や執筆依頼を通じて、石浜恒夫、藤沢恒夫、今東光、陳舜臣、梅棹忠夫などと親交を深めたのである。

のみならず、司馬自身も精力的に執筆活動をしていた。筆者はこれまでの調査を通して、司馬は50年代前半「風神」という筆名で計107点の記事(うち91点未収録)、60年代前半の「世相アラカルト」コラムにおいて、計33点の原稿(うち29点が未収録)を執筆したことを明らかにした。その中に、例えば「大阪文化」「大阪の郷土文学」「布施と十三」など、大阪に直接関係する文章が数多くある。仕事の関係で「大阪離れ」になった司馬は、大阪に転勤し『大阪新聞』という環境に取り囲まれながら、大阪への関心がようやく燃え始めたのである。

本山コレクションの青森県出土資料

—佐藤 蓼・蓑虫山人・神田孝平と久原房之助—

山 口 卓 也

I 関西大学博物館の本山コレクションには、東北地方の資料が多数含まれている。その多くは、東京人類学会初代会長で政官界の重鎮でもあった神田孝平（1830-1898）が、人脈を駆使して、各地の考古学研究者から蒐集したものである。

神田の青森県考古資料の収集は、青森在住の研究者、佐藤 蓼（1852-1944）と放浪の画家、蓑虫山人（1836-1900）が深く関係した（関根・上條2009）。佐藤は、営林署（青森大林区）に勤務するかたわら、植物画で名を成した。佐藤は、青森県亀ヶ岡遺跡の遺物に刺激されて、県内の考古遺物の研究を始め、明治12年頃から考古資料を蒐集する。明治19年に東京人類学会に入会し、神田や中央の学会と交流をもった。

蓑虫山人とともに、青森各地の研究者や蒐集家を訪ね、考古資料の画（考古図譜）を454枚残した。64枚に作画年が記されており、明治13年からほぼ10年間に多く描かれている。この時期、佐藤は東京人類学会で図による報告を頻繁に行っており、中央の研究者も佐藤の図を多く利用している。中央の考古学研究動向に連なった知的刺激と、青森県の考古学情報を中央に伝達することに対する使命感が、その精進につながったのではなかろうか。

青森県の考古資料を最初に神田に仲介したのは、画家、蓑虫山人であったとされる。考古資料を描いた蓑虫山人の画風は純化デフォルメであったが、佐藤は同じ資料を詳細に観察して「実測図」とした。



図1 蓑虫山人が描いた考古資料図（弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター）

佐藤の図のいくつかには付記があり、旧所蔵者の名前や出土地、発見の経緯を知ることができる（関根2009 他）。対照作業の結果、本山コレクションで出土地不詳とされていたもののいくつかは、青森県の出土地と由来を確認できた。

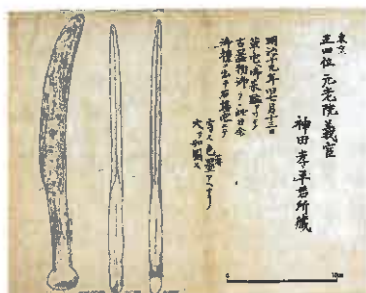


図2 佐藤 蓼の描いた
神田孝平旧蔵石刀



図3 本山資料
MY-S0233



図4 佐藤 蓼が描いた
須恵器



図5 本山資料
MY-K2242

図2の石刀は、明治19年7月13日に神田孝平の青森訪問を機会として描かれたもので、このときすでに神田孝平所蔵と添書きされている。その形状から、本山コレクションの石刀 MY-S0233（図3）と特定できる。

図4は、明治14年に描かれた須恵器大甕である。西津軽郡猫縁村山本惣左衛門の所蔵とあり、出土地は現在の鶴田町稲元遺跡と判明している。底部のすばまる特徴のある器形と口縁部の欠損が正確に描かれていたことから、MY-K2242（図5）と特定できた。

本山コレクションでは、その他に石棒や独鈷石、環状石斧、土面、晩期注口土器、壺形土器、

鉢形土器などが描かれている。これらも、菰虫山人が仲介して、青森県の蒐集家から神田孝平へ譲渡されたものと考えられる。

本山彦一は、神田の死後、昭和5（1930）年に古物商から神田孝平旧蔵の資料を購入する。神田とは、慶應義塾や福沢諭吉との接点で面識があったことも理由の一つとなったにちがいない。その結果、神田の旧蔵品約1300点で自身の蒐集品を拡充し、日本全国、朝鮮半島や台湾、南洋諸島まで幅広いコレクションに網羅することになった。昭和7年には、濱田耕作京都帝国大学教授の教示と援助を受けながら、大阪府堺市濱寺の富民協会農業博物館に、本山考古室を開室する。

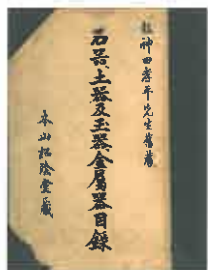


図6 本山彦一蔵
故神田孝平先生
旧蔵資料の目録

本山彦一は、八戸市
是川遺跡に石碑を建立

するなど、死去するまで青森県の遺跡に関心を持ち続けた。佐藤部とも交流があったという。

Ⅱ 佐藤部は、膨大な遺物を蒐集したが、大正8（1919）年、大病を患ったのを契機に、その所蔵品すべてを大阪の政財界人、久原房之助（1869-1965）に譲渡した。「雪櫃で5台分」という膨大な資料で、対価は当時の九千数百円であったという。この譲渡の紹介者が誰だったか、ぜひ知りたいと思う。

久原房之助は、藤田伝三郎男爵の甥で、一時藤田組支配人を勤め、後に日立製作所の基となった久原鋳業所を起こしたことで知られる。昭和に入って、立憲政友会から衆院議員、閣僚となり、さらに2.26事件や大政翼賛会に関与、「政界の黒幕」「怪物」などと呼ばれた。

久原は、数寄者として美術骨董趣味で知られている（斎藤2012）が、考古分野の蒐集を続けたようとした形跡は認められない。逆に、政界に転じた昭和3年、これを鋳業所経営で関係のあった東北帝国大学にあっさりと寄託している。

本山彦一（1853-1932）は、継続して考古資料の蒐集を続けた点で、久原と違っている。同じ慶應義塾出身で藤田組に勤め、さらに久原の姉が本山の妻であったことから、面識があったことは間違いない。現在の藤田美術館のコレクションを形成した藤田男爵も両者の縁戚であったので、三者に

濃密な交流があったことが想像できる。

久原が佐藤のコレクションを譲り受けた大正8年は、本山が最も精力的に資料蒐集、発掘調査の支援と派遣を行っていた時期にあたる。本山は、大正元（1912）年の宮崎県西都原古墳群の発掘を支援見学した後、「考古趣味」が高じ、大正6年から7年には、本山自身が「三大発掘」に数える大阪府国府遺跡を発掘し、多くの出土品を入手した。大正9年には、東北地方に足を延ばして三陸海岸貝塚の発掘を行っている。

本来、本山自身が、このような東北の考古学蒐集資料を渴求していた可能性があるのに、特に欲求が強いと思えぬ久原が、佐藤の資料を入手し、さらにあっけなく手放すことになった背景には、本山への数寄者としての対抗心、または逆に本山から積極的な示唆があったのではないと思われる。

一方、大病を脱した佐藤は、再び考古資料の蒐集を始め、昭和初期には再び1000点近くのコレクションを形成したという。

Ⅲ 大正期、各地の知識人、財界人は本業の傍ら、社会奉仕や近代数寄者として、茶の湯や美術品、骨董の蒐集、建築道楽など趣味世界で、さまざまな活動をおこなった。コレクションは特定の分野への「こだわり」が生み出す生成物である。これら非経済的な活動は、実は人的な関わりの中で相互に触発されたものだったかと思われる。

関西大学博物館の本山コレクションには様々な背景のものがあり、由来を解きほぐすことによって、日本考古学の歴史を垣間見ることができ。今後も、検討を続けていきたい。

佐藤部について、弘前大学の上條信彦氏から教示を受けた。御礼申しあげる。

引用・参考文献

- 上條信彦 2011「佐藤部 考古画譜Ⅲ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
斎藤康彦 2012「近代数寄者のネットワーク」思文閣
関根達人・上條信彦 2009「成田コレクション考古資料図録」
弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
関根達人 2009「佐藤部 考古画譜Ⅰ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
関根達人 2010「佐藤部 考古画譜Ⅱ」弘前大学人文学部附属
亀ヶ岡文化研究センター
東北大学文学部 1982「東北大学文学部 考古学資料図録」

伊丹十三記念館を訪ねて

榎 本 力

はじめに

デザイナー・俳優・エッセイスト・CM作家・映画監督など様々な分野でその多彩な才能を発揮、映画『お葬式』『マルサの女』では、キネマ旬報ベストテン1位を始め数々の賞を受賞、「マルサ」「あげまん」などの業界用語を一般的な言葉として認知させ、独自の映像世界を創造し、いまなお多くのファンを持つ伊丹十三（京都府生まれ本名池内義弘、通称岳彦1933～1997）。その記念館を愛媛県松山市を訪ねた。



伊丹十三記念館

松山市は、伊丹が作家大江健三郎や英文学者安西徹雄らと、多感な高校時代を過ごした地であり、父伊丹万作の故郷でもある。

当初は、万作の記念館を作る計画であったが、平成9（1997）年12月20日伊丹の突然の死によって中断された。

その後、夫人で女優の宮本信子を館長として、平成19（2007）年伊丹の誕生日5月15日に伊丹十三記念館（資料数8万余点、敷地面積2442.97㎡、建築面積745.35㎡）は開館した。



石手川畔に建つ記念館は、建築家中村好文設計の高さを押さえた平屋建てのような、黒板張りの簡素な外観を持ち、周囲の建物とは一線を画しているよう

でいて、不思議とその風景に溶け込んでいる。

館内に入ると受付とミュージアムショップ、中庭の中央には桂の木が涼やかに立っている。そしてそれを取り巻くように回廊を巡らし、右に常設展示室・企画展示室、中央に小さなカフェ、左には収蔵庫を配置している。

常設展示室に入ると、館長宮本信子のビデオメッセージが流れ、写真の伊丹が照れ臭そうな笑顔で「やあいっしょい」と出迎えてくれる。

展示は伊丹の多才さを示すとともに十三の名前にちなみ、13のコーナー（①池内岳彦②音楽愛好家③商業デザイナー④俳優⑤エッセイスト⑥イラストレーター⑦料理通⑧乗り物マニア⑨テレビマン⑩猫好き⑪精神分析啓蒙家⑫CM作家⑬映画監督）に分かれている。



岳彦少年の「朝顔日記」、「夏季日記」や「昆虫観察ノート」などの観察力、図鑑のような描写力に簡潔な文章や装幀は、自然と身を乗り出して見入ってしまうほどの見事さである。

高校時代のクラス写真を見ると、男女ともに制服を着用しているが、伊丹だけは私服長髪である。現在よりはるかに校則が厳しい時代に、学校という枠なんか物ともしない伊丹の面目躍如たる姿がある。

イラストレーターコーナーでは、手まわし式閲覧台で、伊丹の著書『ヨーロッパ退屈日記』『問いつめられたパパとママの本』『女たちよ！』などのイラストを手まわしで、自由に見ることができる。

そして引き出しを巧みに使い、「蓄音機」、「自転車」、「張り子の犬」、「犬の歯を抜き取る法」、「二日酔いの虫」などのユーモラスなイラストとともに、「食器類」、「染め付け」、「赤絵」や「骨

董の皿」などを入れて展示台にしている。

猫好きの伊丹は「猫は人間と対等の位置にある。『一匹』と思ったこともなければ、また『飼っている』と感じたこともない。強いというなら、私は、一人の猫と住んでいる、とでもいうべきだろう。」(註:「猫」『再び女たちよ』)と書いている通り、猫といるその姿は愛児を抱き見守る父親そのものである。

13のコーナーは、伊丹ファンのみならず来館して初めて伊丹十三という人物を知った人も、伊丹の本や映画をもう一度読み返したい、見たい、是非とも読んでみたい、映画を見たいという思いに駆られるような、楽しい仕掛けと空間に満ちている。

企画展示は「父と子—伊丹十三が語る・伊丹万作の人と芸術—」(平成25年末迄)である。

父伊丹万作(本名池内義豊、脚本家・映画監督。1900~1946)は映画人として『國土無双』『赤西蠣太』『無法松の一生』など数々の傑作を残している。

画家として友人の妻を描いた「吉野夫人像」や「櫻狩り」、エッセイ「伊丹万作エッセイ集」「伊丹万作全集全三巻」(いずれも筑摩書房刊)は、現在も読むことができる。

伊丹は「叱られた記憶しかない。」と語っているが、幼い我が子の写真や、病に倒れた万作が病床で作った「いろはカルタ」は、子を思う父親の愛情が溢れている。

伊丹と同様に多彩な才能に恵まれた人であったが、当時は不治の病といわれた肺結核のため46歳で早世した。この時、伊丹は旧制京都府立京都第一中学校の1年生13歳であった。

常設・企画展示室はやや狭く感じるが、壁面を有効利用することで、各コーナーの豊富な資料を間近に見ることができる。

収蔵庫は、現在メンバーズカード会員を対象に年1~2回公開しているようだが、近い将来には「収蔵展示室」として一般公開の予定と聞く。早期の実現を望みたい。

記念館のホームページでは「みなさまのこえ」に、来館者の感想や要望を写真(希望者)とともに掲載し、記念館と来館者や閲覧者をつなぐ重要な役割を果たしている。

伊丹十三賞

この賞は、公益法人ITM伊丹記念財団が伊

丹が才能を発揮した分野(エッセイ、ノンフィクション、翻訳、編集、料理、映画、テレビ番組、CM、俳優、イラストレーション、デザインなど)において、優秀な業績をあげた人に贈られるものであるとして設けられた。審査員は各分野から映画監督周防正行、イラストレーター南伸坊、建築家中村好文、エッセイスト平松洋子の諸氏が務め、受賞者は第1回糸井重里、第2回タモリ、第3回内田樹、第4回森本千絵と多士済々である。

墓所を訪ねて

記念館から車で約10分、松山市郊外にある池内家の菩提寺「東向山理正院」を訪ねた。ご住職にご案内頂いた墓所は、高台の木々に囲まれた静寂な雰囲気漂う一隅にあった。

左に父万作の池内義豊之墓、そして伊丹は右の池内家累代之墓に眠っている。



墓前で昭和38(1963)年『映画の友』(当時の編集長淀川長治)11月号で初めて読んだ伊丹のエッセイ「北京の55日こぼれ話」、映画『北京の55日(監督ニコラス・レイ)』、『ロード・ジム(監督リチャード・ブルックス)』、テレビドラマ『源氏物語(演出市川崑)』、フィルムが途中で切れたキネマ旬報映画会での『執炎(監督蔵原惟繕)』や著書『ヨーロッパ退屈日記』などに、遠く思いを馳せながら合掌した。



伊丹十三記念館

〒790-0932 愛媛県松山市東石井1丁目6番10号
TEL: 089-969-1313

博物館展示室スタッフ

◆ 博物館だより

◇平成24年度ミュージアム講座「なにわの文化遺産（7）」では、90名の方から聴講の申込みをいただき、3日間開講しました。

10月17日「文化遺産を味わうー絵巻ー」 ケルン大学名誉教授 フランチェスカ・エームケ

10月24日「文化遺産を味わうーやきものー」 文学部教授 高橋 隆博

10月31日「文化遺産を味わうー神像ー」 文学部教授 長谷 洋一

◇11月11日から16日まで博物館実習展を開催しました。今年度は「制服」「書く」「絵本」「鬼」「陵墓」の5班が、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。会期中に359名のかたにご覧いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

◇12月1日から大阪都市遺産研究センターが、博物館第2展示室で特別企画展「道頓堀今昔ー芝居画家 山田伸吉の世界ー」を開催しました。好評につき19日まで会期を延長して、860名のかたにご覧いただきました。



◇1月15日から3月1日まで、第1部「あそびといのりーお雛様と各地民芸品ー」、第2部「末永雅雄先生復元古墳時代甲冑」として、本館が所蔵する資料の紹介展示を行いました。今後もテーマを決めて、随時資料紹介をしていきたいと考えています。

◇下半期に貴重な資料の数々を相次ぎご寄贈いただきました。まずは万葉書家の鈴木葩光先生から、9月の展示会に関わる作品等28点。第17期理事会の発足を記念して、羽間平安元理事長から江戸時代の螺鈿を施した荷鞍と千成瓢箪3点、陶芸作家の木村盛康様からは赫天目大鉢など天目作品5点。さらには榎原考古学研究所附属博物館元館長で本学校友の河上邦彦先生から、モンゴルや中国内部の民族資料91点。永野由紀子様からは、本山彦一に縁の深いご祖父永澤小兵衛氏の遺品11点、篤志家の丸山照代様のご遺族からは各地民芸品58点をご寄贈いただきました。今後誌面や展示等で披露し、充分活用していきたいと考えています。



◇4月1日から5月19日まで、関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会(代表 陶徳民 文学部教授)主催による「近代日本における翰墨の盛典ー大正癸丑の関西蘭亭会ー(仮題)」を開催いたします。博物館企画展は6月3日から開始予定で、刀匠 河内國平先生の作品をご紹介します。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

表紙は子持勾玉(古墳時代 出土地不詳)です。全長17.0cm、横幅6.15cm、厚み1.42cmで、背部・両側面・内側に簡略化した小形の勾玉を付けます。子持勾玉は、集落遺跡から出土することが多く、装飾品として古墳に副葬される勾玉とは性格が異なります。この特異な形態から、玉のもつ霊力と増殖に関連する呪術に使われたのではないかと考えられています。本館では、これ以外にも複数の子持勾玉を所蔵しています。

8月から11月までの間、改装工事のため休館します。大型展示ケースの導入を機に、第1展示室を常設展示室から企画展示室へ機能転換し、より一層の充実を図っていく予定です。また、企画展開催時以外は閉室することが多かった第2展示室(村野藤吾設計の簡文館円形部分)に本山コレクション(考古資料)を配置し、施設と資料の相乗効果をお楽しみいただけるようにしたいと構想しています。ご期待ください。

